2026年4月11日 於杏雨書屋

酒、茶、煙草と仏教

石井公成

1

仏教と酒の関係は深く、僧に大酒飲み多し

京都五山の第二、相国寺鹿苑院内の蔭涼軒：
代々の軒主は足利将軍の指南役。『蔭涼軒日録』を記録。

義政・義尚・義材に仕えた亀泉集証(1424-1493) が記した3巻目の1487年10月から1489年12月までの2年2か月、810日で、飲酒した日は597日、73.7%。1489年正月には28日飲んでおり、回数は81回。当時、65才！
「般若湯」と記し、京都の「柳樽」、僧坊酒の代表の「天野酒」などのほか、「南蕃酒」なども飲む。

伊藤善資「酒好きの禅僧・亀泉集証と『蔭涼軒日録』」（『日本醸造協会誌』第106号第2号、2011年）

2

酒•茶•煙草という三題噺は難しい

仏教では、五戒の最後は「不飲酒」：インドでは飲酒は悪徳
ただ、不殺生、不偸盗、不邪婬、不妄語は、破ると波羅夷（教団追放）だが、不飲酒は波逸提（衆前での懺悔）。
許可を得て薬酒を飲むこと、塗ることは認められていた。

茶は、漢代には飲まれていた記録がなく、四川あたりの茶を飲む記事が見えるのは呉(222-280)、晋(365-420) や宋(420-479)あたりからで、南地が中心。北朝では洛陽の寺に記録が多い。茶葉を煮て「茗粥」と称した。唐代には一般家庭にまで広まり、特に禅宗では眠気覚ましで尊重され、作法化した。8世紀には陸羽『茶経』が出現。固めた団茶。茶の字は早くは「**荼**」であって、唐代に「**茶**」が一般的になる。

3

問題は煙草と仏教

臨済宗楊岐派の白雲守端(1025-1072) の弟子、保福殊禅師：
問、如何是大道之源。
師云、一路入烟草。
僧曰、如何得達去。
師云、千山啼子規。

四川出身の臨済宗の希叟紹曇(?-1249-75?)は上堂で「山花裛翠　烟草如茵」と述べるが、いわゆる煙草ではない。

煙草（tabaco）は新大陸由来であって、アジアへは1575年にフィリピンに持ち込まれたのが最初。戒律が禁じていないため、タイの僧侶は戒律厳守ながら多くが喫煙していた。

4

普及後は処刑前の末期の煙草が許された

近松門左衛門『五十年忌歌念仏』(1707年以前)
密通・殺人の罪で捕らえられ処刑される際の描写：
「清十郎、『いかに警固の色方、口乾きて苦しきに、煙草一服所望したし。……末期の水と観念せん。如何あらん』といひければ、『苦しからじ、それそれ』と煙管煙草を出しける。……『末期の一服を受くることの有難さよ。本望さよ。此の煙草にて十悪五逆の眠りをさまし、充満其願如清涼地(池)』と嘯きて、地獄餓鬼畜生修羅、此の四悪趣の苦患を解脱し、吹き出す煙は沙羅林栴檀の霞と変じ、三宝供養燒香となって、三十三天に薫じ渡らば……」

5

酒、茶、煙草が登場する日本の作品

横井也有(1702-1783)『鶉衣』前篇「煙草説」：
「夜道の旅のねぶたさとて、腰に茶瓶も提げられず、秋の寝覚の淋しきとて、棚の餅にも手のとゞかねば、只この煙草の友となるこそ琴・詩・酒の三ツにもまさるべけれ。……**達摩は九年の壁にむかひて、炭団の重宝を悟り**、……かの愛蓮にならひて、たゞ此類の品定せむに、酒は富貴なる者なり、茶は隠逸なる者なり、たばこはさしづめ君子の番にあたりて、用る時は一座に雲を起し、しりぞく時は袖のうちに隠る。こゝに神龍の働ありともいふべし。下戸と妖物[ばけもの]は世にすたれて、下戸は猶少からず。今や稀なるはたばこぎらひにして、野にも吸、山にも吸へば、たばこ入の風流日々にさかんに、きせるの物ずきとし〳〵にあたらしく……」

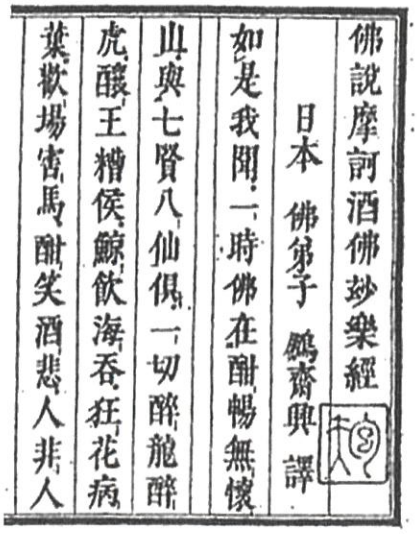
6

＊「琴・詩・酒の三ツ」
白居易「北窓三友」（白居易は実は酒は弱く、晩年は茶好き）：
「今日北窓下　自問何所為　欣然得三友　三友者為誰
琴罷輒挙**酒**　酒罷輒吟**詩**　三友漉相引　循環無已時
一弾愜中心　一詠暢四支　猶恐中有聞　以酔彌縫之
豈独吾拙好　古人多若斯　嗜詩有淵明　嗜琴有啓期
嗜酒有**伯倫**　三人皆我師　……」
白居易「寄殷協律」「**琴詩酒**友皆抛我　雪月花時最追憶君」

＊「かの愛蓮」
周敦頤「愛蓮説」：「予謂へらく、菊は華の隠逸なる者なり、牡丹は華の富貴なる者なり、蓮は華の君子なる者なりと。」
菊を愛したのは陶淵明

7

「劉伯倫や李太白、酒を飲まねばただの人、吉野竜田の花紅葉、酒がなければただのとこ、酔酔酔酔酔、よいやさ」


佛説摩訶酒佛妙樂經
日本　佛弟子　鶴齋興譯
如是我聞一時佛在酣暢無懐
山與七賢八仙俱一切酔龍酔
虎醸王糟侯鯨飲海呑狂花病
葉歡場害馬酣笑酒悲人非人

8

競争相手の口論•合戦の戯文と仏教

日本では、南北朝から室町時代にかけて論争・擬人物が流行。

二条良基(1320-1388)「餅酒歌合」
作者不明『十二類歌合』　＊薬師十二神将の動物と狸の合戦
伝一乗兼良(1402-1481)作『精進魚類物語』＊最後は出家
　精進物の武士が合戦。「沙羅双林寺の蕨の汁、生死ひっすい」
伝一条兼良作『鴉鷺合戦物語』：
　鷺と鴉が合戦し、負けた鴉は出家して鳥阿弥陀仏となって往生。
『酒飯論絵巻』：浄土信仰の酒好きの造酒正糟屋朝臣長持、法華信仰の飯好き僧侶、飯室律師好飯、両方をほどほどにたしなむ天台宗系の中左衛門大夫中原仲成が優劣を争う。

9

酒茶•酒飯•酒餅の戯文

【中国】
唐・王敷『茶酒論』（9世紀成立？敦煌文書に七写本有り）
　＊茶と酒が高貴さを争って論争し、水が仲裁に入る。
四明の太学生松斎勧世文茶酒問答」（1516年）水の仲裁。
　＊広旭上人に与え、日本の明使たちの飲酒を戒めたか。
明代には草木や鳥などの争奇文学盛ん。

【日本】空海『三教指帰』（797年）　儒仏道の三教論争
『酒飯論絵巻』（1500年代半ば前）　＊浄土、法華、天台
臨済宗妙心寺派の蘭淑玄秀『酒茶論』（1576年以前）
　酒と茶の精らしき二人が禅籍など故事を盛んに引いて酒と茶の徳を競い、最後に酒と茶を好む閑人が出てきて仲裁。
江戸時代は酒茶論以上に酒餅論が盛ん。様々なジャンルで口論ものや合戦ものが流行。

10

『円居物語』の「道堅三の友」

作者不明。彩色挿絵入り。3巻3冊。寛文11年（1671）成立か。10編の短い話が収録され、「道堅三の友」は上巻の第三：

「むかし、やま城の国に、千振道堅と云武門の人あり。……富さかんなりといへとも、常にわひしきことを好みて、圃のうちに一つの亭をつくり、……たゝひとり座してしづかなるをたのしみ侍る。……唐土の楽天は、琴・詩・酒の三つを以て三友としてもてあそふ。われは又、和国の風俗なれは、**茶と酒と烟草との三つ**をもて、かの白居易の三友にあつ」、ある夜、茶会から帰って亭をのぞくと：

11

茶の精である「青きうすものを着した」石花先生、酒の精である「色あかく形肥えて、髪大にみたれ、さなから猩々のごとくなるもの、赤地の直衣を着し」た扶老居士が、茶と酒の優劣をめぐって口論。石花が不飲酒戒を持ち出し、酒による悪業は地獄落ちと語ると、扶老は、釈尊は飲み過ぎを戒めたのみで、「一酔のさとりを得て、是をたのしまんも者はいましめたまふにあるへからす」、だからこそ孔子の子孫も「天地に酒星・酒泉」があると述べたなどと反論。そこに十五、六才の美しい女子が、「わらはゝこれ、**けふり子**と申遊女」と名乗って仲介し、それぞれの一族が集まって宴会を楽しみ、消えていった。「誠に、茶・酒・煙草の三つの精気、怪を起し人の交りをなすこと、そのためしまれなるへきにや」

12

江戸末の『酒茶多葉粉口論』

近所の魅力的な女性に色目をつかう愚癡が多い隠居が、酔って寝たところ、夢を見た。徳利の中から「酒盛り如来より八世にして、「樽が大臣の再来」と称する荒入道が登場し、茶の悪口を言うと、茶壺から「宇治川の煎じ茶々木の茶む郎茶が綱」と名乗る「茶むらひ」が現れ、天竺の王后である「茶女」の子である名医の耆婆が死に「茶毘」したら木が生えたので、それを「茶」と名付けたので、茶の効能は素晴らしいと賞賛。酒が多葉粉もそしると、慶長年間に南蛮から渡来した多葉粉が登場して論難。ふざけたやりとりのところに、「飲食両用の惣大将」米が登場して仲裁したとこで目が覚めた。　＊酒盛り＝釋迦牟尼　＊樽が大臣＝達磨大師、＊茶々木茶が綱＝佐々木高綱

13

『酒煙艸の合戦』

江戸中期以後の戯文。冒頭は、

「瓶子元年、樽の年、小夏始の事なるに、酒と煙草の争論あり。……近来は益す莨菪の繁盛し、酒器にも劣らぬ物数寄より無益の金銀鏤れば美麗年々増長し、世上の時宜も盃より先お煙草と調法す、是を遺恨の端として煙草の奢を鎮んと、酒の大将美醂王、諸白太夫に私語て、諸国の名酒を催促し……（軍勢で攻めようとすると）……煙艸は此由を聞くよりも、国分将軍、留葉太夫、幡持舞葉の上々之助、油断ならずと……」（合戦が続いたため）宇治の茶見世（宮）が使者を出して仲裁。

14

『酒煙草合戦』

徳田和夫氏蔵。安永四年（1775）書写の奥書有り。：伊藤慎吾氏が翻刻：

「後醍醐天皇の御末、御盃後の天目、吸筒元年癸の酉の小夏八日の事成るにある人々の集て酒ゑんの興を催しける。其の夜の酒の大将は能登守七尾の庄司と聞へける。扨又煙草の大将は筑紫九ケ国の探題、薩摩の守国部太郎呑吉也。……（下戸が煙草盆を求めると、七尾は酒や肴の風味が落ちると反対。国分が怒り）座敷の掟をしらざるや。忝も某は初手の馳走、其次は茶を出し、さて其次に酒を出す。客によつては一向酒を出さぬも有リ。是程おとりし身をもつて……（ととがめて争いとなり、戦いへ」

15

酒側「釈迦の御弟子、しやかた比丘、酒にてさとりをひらきたまふ」
煙草側「そちらでじまんのしやかた比丘、酒に正気をとりうしな**へ**、道にたをれてふしけるが、しやくそん、そこを通らせたま**へ**……これより、とら打びくとあだなをよぶ」　＊「ひ」が「へ」となるのは訛りか

「服部丹波守、うす葉の駒に打乗て、七貫目掛ケのきせるうちつがひ、ゐいやつときつてはなせば、先にすゝむ七尾が郎党、徳利五郎がほそくびに、はつしと立ツ。何かはもつてたまるべき。いぬいにどうどころびければ、酒けぶりはつとたち、酒はごぶごぶこぼれける。あら、いたわしのわか物やと、上戸も下戸も押なべて、のまぬものこそなかりけり」

16

「みかどよりののちよくでうには。酒と煙草は車の両輪。茶は車の真木。一方かけても。せかいはたゝす。茶は仏に供じて仏道、酒は神にそなへて神道也。たばこは客をもてなして儒道也。酒は……日にちかく陽にして天なり。茶は……月にちかく陰にして地也。煙草は人輪にて是天地人の三才なり」。

奥書：
「　　阿部氏
　安永四年[1775]乙未卯月吉日写之重往[花押]」

17

『大成経』の影響？

儒教・仏教・神道を鼎にたとえ、一つも欠くことはできないとするのは、聖徳太子の編著と称する『先代旧事本紀大成経』。黄檗禅を江戸で弘めた聖徳太子信奉の潮音道海、延宝3年(1674)に「五憲法」を入手して刊行。2年後に太子伝である『聖皇本紀』も刊行。

「聖皇本紀」崇峻2年：
「太子答曰、『世界皆時、有一而足、有二而足、有非三否（現在は末世なので三が必要）…』…天有之三法、世界之三理、無私無妄、別立別益。……三法勝劣，又廃立然。天霊三光、豈亦一乎。五行有得失、闕一則不立。三光為勝劣成功、無微鄙，是即天理也。儒宗仁義、限人倫立。神道正直、限日月立。仏法因果、限世界立」

18

『大成経』に見る僧侶と煙草

『大成経』「未然本紀」：

「第十百歳

太歳在壬午、復及在辛酉。変法來、中華傾。押却神道、軽無仏法。沽僧百千、無功費国。乱僧千万、無道惑俗。八僧起八州満，形偸仏、心破仏。姧僧・俗僧・儒僧・医僧・画僧・変僧・盲僧・僮僧、任僧官、取人敬、修俗業、誹仏道。湯木費米、**煙草費米**、瓦礫費銀、反古費金」

＊「未然本紀」は聖徳太子の予言とされるもの。この箇所は、『日本書紀』によれば622年に太子が亡くなってから千年後。朱子学が入ってきて神道・仏教を抑圧し、僧侶も堕落して信仰を失い、煙草で無駄遣いするという。

19